

知ってますか
技術の

あれ
これ

7

ペリー提督の献上品 蒸気車の模型

河田迪斎と日米和親条約

三浦 基弘
MIURA Motohiro

大東文化大学講師



黒船4隻、浦賀に来航

昨年、師走恒例「ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテンのひとつに「ととのいました」が選ばれた。「謎かけ」のお題が出て小考し、その完成を告げるときに言う、漫才コンビ「Wコロン」のねづっちの“ことば”である。かつてテレビの「笑点」で人気者になった謎かけの名手、二代目春風亭梅橋作のひとつ。「新聞」とかけて「お坊さん」と解く。そのココロは——今朝（袈裟）きて今日（経）よむ。この「謎かけ」はどの時代にも理解できる。

時節柄、お題は「いまの政治」で、ととのえた新聞記者がいた。「いまの政治」とかけまして「武将の心得」と解く。そのココロは——センゴク時代にはカンの働きが勝負。なかなか面白い。センゴクは仙谷由人前官房長官、カンは菅直人首相のこと。ところがこの謎かけは、50年後、現在の面白さは伝わらないであろう。時代を超えて語り継がれる「謎かけ」は少ないものだ。

160年経った現在でも、ととっている「狂歌」がある。1853年、ペリーは威嚇しながら浦賀に黒船4隻を率いて来航した。いわゆる砲艦外交（gunboat diplomacy）である。「太平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）たった四杯（四隻）で夜も寝られず」という狂歌がはやった。当時、宇治の銘茶「喜撰」があった。その上等の煎茶「上喜撰」に、船の蒸気船にかけて幕府の狼狽ぶりを皮肉った。

欧米の国々は世界中の海で捕鯨を盛んに行ってい

た。産業革命によって、夜間も工場の稼働をするため、明かりの燃料として鯨油を必要としていたからである。主にマッコウクジラであった。アメリカは太平洋で盛んに捕鯨を操業しており、日本を燃料・食料の補給地として狙っていたのである。2世紀あまり鎖国をしてきたが、ペリーの率いる東インド派遣艦隊に開国を余儀なくされた。鎖国時代といわれる江戸期にも細々とではあるが、オランダなどを通じて西欧の技術が導入されており、またわが国古来の技術伝承の職人教育も行われてきた。しかし体系的な日本の工業、工業教育を考察するとき、管見ではあるがマシュー・C.ペリー（Matthew Calbraith Perry 1794-1858）の黒船来航からはじめてみたい。

ペリーは前任者（たとえば1846年、アメリカ東インド艦隊司令官ジェームズ・ビドルが2隻の軍艦を率いて浦賀に来航し、通商を求めたが拒否される。米軍艦の最初の日本寄港であった）の日本開国の失敗の轍を踏まぬよう、8ヵ月の周到な準備をした。そして航海に必要な海図を鎖国中、交流のあったオランダより3万ドルの大金で入手したり、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルトの『ニッポン』、エンゲルベルト・ケンペルの『日本史』など日本に関する書籍を可能な限り収集し、読破したという。一連の調査報告の一部は『ペリ提督 日本遠征記』（土屋喬雄・玉城肇訳 全4巻 岩波文庫）にまとめられている。文才が無いと自覚していたペリーは、遠征記をまとめる際、当時『緋文字』で有名になったナサニエル・ホーソンに依頼したが断られたという。